

第12回 明治大学文学賞

阿久悠作詞賞受賞作品について（三田 完）

（全体講評）

まずは課題のタイトルについて。

人類はフィクションを造ることで歴史を築いてきた——と論じたユヴァル・ノア・ハラリの著作『サピエンス全史』を意識したのが「サピエンスをよろしく」です。では、「小春日和」は？　じつは、さだまさしが山口百恵のために書いた『小春日和』という詞があったのです。ところが、レコード・プロデューサーの判断で、その歌は『秋桜』とタイトルを変えて発売されました。結果、今も歌い継がれるヒット曲に。でも、「小春日和」も悪くはない……ということ。

今回は111篇と、いままでで最高の応募数となりました。コロナ禍で通常と違う学園生活を余儀なくされている皆さんが、作詞活動に意欲を示してくださったことに深甚の敬意を表したいと思います。

数だけではなく、作品のレベルも年々向上しています。面白い作品が多々あり、審査しながら目移りがして困りました。個人的には、縦書きの作品が多かったのも、〈歌謡曲〉という感じがして、嬉しいことでした。

結果、課題の『サピエンスをよろしく』をタイトルにした作品を大賞に選びました。きっと、面白いメロディーがつくと思います。

言葉を紡ぐ活動をつづけるかぎり、ホモ・サピエンス（考える人）には未来があります。

(作品評)

《大賞》

No. 1051 『サピエンスをよろしく』

このタイトルで、コロナ禍、原子力行政、異常気象……等々、現代のすべてを真面目に語ることができます。しかし、あえてちゃらけた、まるで書割りのセットで宇宙旅行をするような歌ができたことに、拍手。いわば、21世紀の「スーダラ節」と思いました。(そういわれても、若い作者にはピンと来ないでしょうが)

8Kテレビの次には16Kが、ケータイは5Gにつづいて6Gが――進歩すること自体が目的であるサイエンスに、サピエンスはどうつきあっていけばいいのか？ 先行きが見えない不安があればこそ、無責任男になってしまう。高度経済成長のさなか、植木等が映画で演じた^{たいらひとし}平均も同じ気持だったことでしょう。

《佳作》

No. 1038 『星－合ひ・愛－』

牽牛と織女が会う七夕のことを、平安時代の人たちは「星合い」と称しました。そんな古めかしい言葉に、現代の女性の気持ちを重ねた作品です。「バカなベガでごめんね」というフレーズが素晴らしい。

タイトルは『星・愛』でよかったのでは？

No. 1065 『しわ』

大学生がこういう詞を……最初は違和感を感じました。しかし、歌だからこそ、男性が女性になることができ、若者が老人になることもできる。意欲的な挑戦です。老いがテーマとはいえ、救いのあるシャンソン。

No. 1074 『西参道の片隅で』

表参道ではなく、西参道を選んだところがシブい。現実の街を歩いていて、ふと結界を超えて夢の世界に入ってしまった——そんな印象です。

言葉遊びが効いています。井上陽水が歌ったらいいな、と思いました。